『意味とシステム』書評へのリプライ

佐藤俊樹

Ⅰ. はじめに

雑誌『相関社会科学』19号の企画書評で、私の著作『意味とシステム』(勁草書房、2008年)をとりあげていただいた。高橋幸さん、出口剛司さん、三谷武司さんの書評はそれぞれちがった角度から、私の著作の重要な論点をとりあげ、肯定できる部分とそうでない部分を論じておられる。

私自身の経験からいっても、批判的な書評を書くには、通り一遍にほめるよりも数倍、時には十倍以上の時間と労力がかかる。批判することは、自分自身の立論も他人の目にさらし、批判の対象にすることだからである。何よりもまずその点で、三人の方に感謝したい。『意味とシステム』は通常の意味では決して読みやすいものではない。それを読み込んで、なおかつ批判的に書評するのは、膨大な作業量を必要としたはずだ。

私自身の立論を肯定するか否定するかにかかわりなく、そういう読み方をしてもらえたことは、著者にとって幸せである。それは、ルーマン自身のシステム理論に「否定のカード」を贈る(『意味とシステム』10〜12頁、以下ただ「頁」と表記した場合は本書の該当頁をさす)という、この著作のコミュニケーションに対して、さらなる「否定のカード」を贈ることで接続してくれたことでもある。

それゆえ、私自身も「勉強します」「今後の課題です」と答えてやり過ごすのではなく、さらなる「否定のカード」を贈りうる形で、つまり批判的な書評にも批判的に応答することで応えたい。そのため、このリプライでは書評企画の並びとは逆の順序で、つまり三谷さんの「理論的検討の進展のために」、出口さんの「経験的研究に向かってルーマンを内破させること」、そして高橋さんの「システム理論と言説分析」の順で、応答する。三つの書評はこの順番に、より多くの批判的な内容が盛り込まれていると思うからだ。

Ⅱ. 意味とコミュニケーション

Ⅱ. 1. 意味の理解と意図の理解

私の理解した範囲でいえば、『意味とシステム』での立論をめぐって、三谷さんは大きく三つの焦点を提示していると思う。第一は理解／誤解とは何かという点、第二は私が定式化した枠組みの経験的な記述力、第三は「コミュニケーション」という概念の位置づけである。それぞれきわめて重要な論点なので、この順番で、私自身がどう考えているかを説明してリプライとしたい。その上で、最後に、ルーマンのテクスト読解について私の考えを述べたい。

第一の論点、理解／誤解から。これについては、三谷さんの批判では重要な点が二つ見逃されているように思う。①意図の理解と意味の理解がちがうことと、②理解の不確定性には社会次元Sozialdimensionと時間次元Zeitdimensionおよび内容次元Sachdimensionの三つがあることである。三谷さんの議論は、①意図の理解と意味の理解を混同した上に、②意図の理解での社

会次元の一意性を時間次元および内容次元の一意性ととりちがえていると思う。この混同は三谷さんだけではなく、現在の社会学のなかでもかなり広く見られる。例えば、主意主義的行為理論もまた「行為の意味がその行為自体において確定する」「後続行為者による理解とは独立に、先行行為者の行為の意味が定まる」(書評p.119、p.120、以下ただ「p.」と表記した場合は『相関社会科学』19号の該当頁をさす)と考えている。

こうした「行為の意味」の理解は正しくないと私は考えている。これは②「意図を理解する」場合の社会次元の一意性を時間および内容次元に拡張した上で、①意味の理解にまで拡大したものである。

②の方から解説すると、理解にはつねに内容次元での不確定性がともなう。S・A・クリプキが示したように、不一致が生じた場合にそれを解消することはあるが、解消によって一致したとはいえない(Kripke [1982=1983])。つまり、確定したとはつねにいえない[(1)]。また、時間次元でも一意性は成立しない。すなわち、事後的に書き換えられうる。

この点は意味の理解にも意図の理解にもあてはまる。理解において必ず生じている事態である。「誤解」という語が使えることは(p.120)、これと矛盾しない。「誤解」は要求されている一定の整合性をみたさない場合に広く使われる語であり、意味がすでに確定されていることを必要としない。

さらに、①意味の理解と意図の理解はちがう。たんに理論的にちがうだけでなく、日常言語の上でも私たちはこの二つを区別している。一番わかりやすい例をあげると、(a)「あなたはあなたの行為の意味を誤解している」とはいえても、(b)「あなたはあなたの行為の意図を誤解している」とはいえない。(b)が成立するのはきわめて特殊な状況下、例えば相手が正常な判断能力をもっていないとみなす場合などに限られる。

もし意図の理解と意味の理解が同じであれば、(a)と(b)の用法にちがいはないはずだ。さらに、もし「後続行為者による理解とは独立に、先行行為者の行為の意味が定まる」とすれば、「あなたはあなたの行為の意味を誤解している」ともいえない。もしいえるとすれば、「先行／後続」と「定まる」について、私と三谷さんの間には大きな理解のずれがあると思う。だから、三谷さんが想定する行為の意味の経験的な同定手続きを示して、これらの点をもっと詳細に定義してほしい。

私の考えでは、(a)と(b)のちがいは、意図の理解では本人(とされる主体)の報告が優先されることから来るものだ。その意味で、意図の理解では社会次元で一意性がある。すなわち、正常な判断能力がないなどの理由で報告可能性自体を否定しないかぎり、誰が最終的な同定者であるかは明確に決まっている。ただし、これは事後的に報告内容が変更されることを排除しない。「実は～というつもりだった」という言い方はつねにできる。それゆえ、意図の理解でも、時間および内容次元での一意性は保証されない。

II. 2. 社会学での事後成立性

この二つが区別されることは、今回の書評で三谷さん自身が傍証しているように思う。三谷さんは、私の「コミュニケーションも 行為も本来は無定義語だ」(194頁）という文について、「本気ではないのだと思うことにしよう」と書いている(p.120)。

もし主意主義的行為論が本当に正しいのであれば、三谷さんは「本気だろうか？」と私に訊き返すか、あるいは「佐藤俊樹は正気ではない」と書いたのではないだろうか。ところが実際には、「本気ではない……ことにしよう」という形で、すなわち「本気ではないと理解せざ

るをえない」という形で、私の書いた言葉の意味が同定されている。

だとすれば、三谷さん自身が「後続行為者による理解」によって「先行行為者の行為の意味」を同定していることにならないだろうか。実際、もし私がこの反論を書かなければ、三谷さんや三谷さんに近い人々は、私が「本気ではない」と理解し、その理解がそのまま妥当しつづけていたはずだ。

これを「自分の行為を相手が誤解して行為し返してくることがある」(p.119)といった形で、偶発的な事態だと考えるのは正しくないと思う。私自身が生存しなくなる可能性がつねにある以上、私の反論が必ず書かれたとは限らない。いうまでもなく、日常的な行為の意味の理解でも、そして社会学的な理解でも、理解の時点では死んでいる主体、すなわち「行為し返し」されえない主体に帰属する行為の意味があつかわれることは、きわめてよくある[2]。

だとすれば、三谷さん自身もまた、主意主義的行為理論にしたがった理解をしていないのではないだろうか。だとすれば、この理論は三谷さんにとっても端的にまちがいであり、捨てるべきものだと思う。

この点に関しては、率直にいって世代の差を感じた。私たちの世代は、否応なしに主意主義的行為理論につきあわされ、エスノメソドロジーや象徴的相互作用論に出会い、さらにはG・アンスコムやクリプキを通じて、主意主義的行為理論が経験的な妥当性をもたないことを発見し、それによらない形で社会学を始めることになった。

ここで指摘した内容および時間次元での不確定性は、分析哲学でも意図的行為intentional actionの記述依存性として、よく知られている。アンスコムの反因果説とD・デイヴィドソンの因果説との対立も、この記述依存性を前提にしたものであり(Anscombe [1957=1984], Davidson [1963=1990])、M・ウェーバーが問いつづけた意味の主観的な側面と客観的な側面のちがいにも通じる。

さらに、社会学の経験的な分析でいえば、R・K・マートンが論文「予言の自己成就」でとりあげた「トマスの公理」、すなわち「人が状況situationを現実として定義すれば、その状況は結果において現実である」も、その一つである。実際、この論文のなかでマートンは、白人の「エイブ」とユダヤ系や日系の「エイブ」が同じように「夜遅くまで働い」たとしても、全くちがう意味で理解されることを例にあげている(Merton [1968=1961: 390-1])。これは社会学が研究してきた構造的な差別のメカニズムの重要な一部であり、「自分の行為を相手が誤解して行為し返してくることがある」とはちがうものだ[3]。

アンスコムは意図的行為の記述形式の一つを「行為者が自分の行為によってその状態が生じるだろう、と考えていることをわれわれが理解できるようなもの」と定式化している(Anscombe [1957=1984: 67])。これを借りれば、社会学はこの「行為者」と「われわれ」が必ずしも一致しないことを前提とし、特に両者が乖離する状況を主要な探究課題にしている、といえる。差別や組織はまさにそうである。記述形式の信憑性も記述内容の妥当性も、「行為者」ではなく、「われわれ」において確保される。

私の目には、むしろ三谷さんの議論がそうした社会学内・外での研究の蓄積を無視しているように見える。

II. 3. 意味を成立させるしくみの性能

第二の論点もこの第一の論点と関連する。

私は、行為の意味の理解をとらえる上で、私の定式化した枠組みが十分に経験的な記述力をもっていると考えている。三谷さん自身も書いてくれたように、これはルーマンの読解の正し

さとは関係ない。もしこの部分が「見かけ上はルーマン解釈論に大きく負っている」(p.123)ように見えたとすれば、書き方が悪かったのだろう。もちろん、こうした報告自体、意図の事後的な書き換えだと理解されうるものであるが。

私の提示した枠組みは完全なものではないだろうが、経験的な記述力は相対的な妥当性で判断されるべきである。主意主義的行為理論がまちがっているのであれば、どんな枠組みも自明にまちがっていないかぎり、主意主義的行為理論よりは記述力がある。そして、具体的な組織現象やおしゃべりや国家のあり方を考える上でも、この枠組みは従来のものよりも記述力がある。『意味とシステム』の後半部はそれを示すためにある。

この点について、私は三谷さんが一つ錯誤している可能性があるのではないかと思った。断定できるほどの材料はないのであくまで推測だが、広くありうる錯誤なので簡単に述べておく。

主意主義的行為理論では、意図の理解と意味の理解が混同され、意図の理解における社会次元の一意性が、意味の理解の時間および内容次元での一意性と混同されている。そのため、意味を内容的に一意に決定できるアルゴリズムを示さなければ、経験的な記述力がないように見えるが、これは錯覚である。本人の報告に事後的な変更可能性がある以上、こうしたアルゴリズムは成立しない。さらに日常的な行為の理解では、内容次元の一意性も成立しない。したがって、こういうアルゴリズムを求めること自体が虚偽問題である。

具体的にいえば、例えば組織システムでは、「組織として」である／でないという意味づけは接続された時点では一意に成立する必要があるが、「組織として」の行為としてどんな意味があるかは、必ずしも一意で成立しなくてもいい。その点でいえば、行為の意味が「定まる」という表現は不適切である。「行為を属性づけるqualify」や「意味が規定される」ぐらいが適切だろう。意味を成立させるしくみはそういう性質のものである。

II. 4. 文脈の経験的な記述

その点をふまえていえば、『意味とシステム』第一章で述べた相互作用システムと組織システムのちがい、特にそれぞれでの文脈のあたえられ方のちがいとその帰結は十分に経験的な記述になっている、と私は考えている。例えば47-51頁では、三谷さんのいう「(1)後の行為に文脈を与える、(2)前の行為が与えた文脈の中に位置を占める、(3)前の行為を解釈する、(4)後の行為による自らの解釈を可能にする」(p.121)あり方を具体的に述べている。

なお、もし「文脈」という語まで定義する必要があるのであれば、「その行為に付与された意味と当該行為への理解との不一致が見出された場合にそれが解消される方向にうごくような行為の範囲」になる。具体的に何がその範囲に入ってくるかは、参照鍵の形態だけでなく、当該の行為への理解の内容にも依存する。したがって、形態論上の特性は記述でき、それだけでも多くの場合従来よりも深い社会学的な分析ができるが、個々の具体的な行為について、何が文脈になるかを一般的な形では決定できない。先ほど述べたように、そういう形で行為の意味を同定するアルゴリズムはそもそも存在しない。

この部分への批判に関しては、書評での三谷さんのとりあげ方に少し奇異な感じをうけた。たしかに三谷さんがいうように、「後の行為は前の行為（列）につながることで、前の行為がなす文脈のなかにおかれる。その文脈のなかで自らの意味を成立させる」(191頁)という文だけで理解せよ、というのは無茶な話だ。だからこそ、『意味とシステム』には第一章や第五章がついている。三谷さんの引用した第三章は、あえて抽象的かつ図式的に議論した箇所である。

もし経験的な記述として成立しているかを論じるのならば、具体的な事例に即して経験的な記述を試みた箇所をとりあげて、具体的に「〇〇が欠けている」という形で反論するのが通常のやり方だと思う。なぜ第三章の、一番抽象的で図式的な説明をわざわざ例にとったのか、私には整合的に理解できなかった。

『意味とシステム』では、第一章で相互作用と組織を対比して説明し、第五章では組織の官僚制をとりあげている。そこにも「コンテクスト」や「文脈」は当然使われている。「コンテクスト」は第一章に16回、第二章に11回に出てきて、第二章５・３で「文脈（コンテクスト）」「コンテクスト（文脈）」と同義であることを確認して、以降は「コンテクスト」ではなく「文脈」という語を用いている。この意味での「文脈」は、第三章以外でも、第四章で２回、第五章で５回出てくる。第五章では、行為の意味が後から書き換えられる事例も、５回あげている。

経験的な記述力を論じる場合は、これらの具体的な記述で議論した方が生産的な議論になると思う。私の提示した枠組み以上に良い枠組みを三谷さんが知っているならば、それは容易なはずだ。抽象的な記述をとりあげて抽象的に不十分だと断じられても、私の示した枠組みが不十分なのか、それとも三谷さんがこうした意味同定の実践を経験的に知らないだけなのか、私の側では区別できない。

Ⅱ.5. コミュニケーションの定義

第三の論点、「コミュニケーション」の定義もこれらに関係する。

私としては、コミュニケーションの定義はあたえたつもりだ。第一章でいえば「この「コミュニケーション」は何かを伝達する行為ではなく、関係づく・関係づける働きそのものである」(55頁)、第三章でいえば「自らに関係性を内蔵している」形で定式化される行為であり(194頁)、第二章ならば「行為が関係的に定義されることだけ認めれば、……M・ウェーバーが提唱した理解社会学の延長上に書き換えることができる」(71頁)が、それにあたる。そして、「関係づける」「関係的」で具体的に何をさすかを、文脈のあたえられ方のちがいとその帰結の形で、くり返し提示した。

それらからもわかるように、「関係づける」のは先行行為を理解するという営みそのものである。したがって、コミュニケーションとは何かとあらためて問われれば、「他の行為への理解をその成立の不可欠な契機としてふくむ形での行為」だともいえる。どんな形でふくむのかを論じたのが、第四章の「コミュニケーションの定義」①～③の箇所だ。

行為は他の行為への理解を、成立の不可欠な契機とする。それゆえ、その行為の成立において、他の行為はこの行為によって理解された意味をおびる。それが「関係づく・関係づける」ことである。したがって、上の定義を行為群全体に言及する形で言い換えれば、「他の行為への理解と他の行為による理解をその成立の不可欠な契機としてふくむ形での行為」ともいえる。理解そのものが一つの行為に内属していても、行為群全体としてみれば、一つの行為は理解を通じて他の行為において成立する[(4)]。

ただし、これが十分に自明な定義だとは私は考えていない。なぜなら、これは「コミュニケーション」という語を「理解」という語で言い換えただけだからである。そして、Ⅱ.1やⅡ.2で述べたように、理解とは何かは、現在の社会学の内部では決して自明ではない。つまり、「コミュニケーション」よりも「理解」の方が自明だとはいえない。

それが、第四章の節題名に「コミュニケーションの定義」(225頁)と掲げながら、あえて「コミュニケーションも行為も本来は無定義語だ」(194頁)と書いた理由でもある。三谷さん

はこれを「脱力的言明」とし「うんざりだ」と述べておられるが(p.120)、私は同義言い換えしか見つけられなかった。だからこう書くしかなかったし、もちろん本気でこう書いている。

実際、第四章のコミュニケーションの定義論は、理解の定義論として書き換えても全く同じことになる。私としてはむしろ、「『コミュニケーションの定義』といっているが、たんに理解という語に言い換えただけではないか」という反論を予想して、「それはわかっていて、だから『無定義語』だと述べた」と答えるつもりだった。

この定義論について、三谷さんは「伝達／情報／理解という概念をうまく組み合わせて記述すればよいのであって、コミュニケーションという一つのものが成立したり接続する、というような言い方をする必要はない」(p.123)とも述べている。前半部に関しては同じ意見だが、後半部に関しては、「うまく組み合わせ」る際に理解が成立するとはどういう事態かの記述が必要になり、その記述は「コミュニケーションが……成立したり接続したり」とほぼ同じ明証度になるだろう、と考えていた。

II.6.「冗長」の意味のずれ

なお、これに関連して、三谷さんは「システム概念は冗長であるが、コミュニケーション概念は必要であるというのであれば、その根拠を示す必要がある」(p.123)と述べているが、これはたんに「冗長」の意味をとりちがえたものだと思う。

「システムは冗長だ」というのは、ルーマンのシステム概念には、a)コミュニケーションだけからなるという意味と、b)「この」コミュニケーションである／でないの区別があってその区別が理解に影響しているという意味と、広狭二つの意味があって、a)の方は不要だ、ということである。補足しておくと、だからといって「システム」という概念が要らないとは私は考えていない。b)の状態だけを「システム」と呼ぶ分にはかまわない。むしろ便利な言い換えとして望ましい。

それに対して、三谷さんが「コミュニケーョン概念によって指示されるのとまったく同じ事態を、三つの選択概念によって記述することが可能だということになる。だとすれば、コミュニケーション概念は冗長なのではないか」という場合の「冗長」は、言い換え可能だからどちらかが要らない、ということだと思う。もちろん、より自明な概念を使って言い換えられるのであれば、これは全く正しい。けれども、先ほど述べたように、私は「コミュニケーション」に比べて「理解」がより自明だと考えていない。

むしろ、意味の理解と意図の理解とがあるという立場からいえば、エスノメソドロジーや象徴的相互作用論の出現以降、つまり主意主義的行為理論への反省が広まって以降、少なくとも社会学の分野では「コミュニケーション」が「意味の理解」をさす形で、より限定的に使われてきている。その点で、現在では「コミュニケーション」の方が「理解」よりも限定されており、使う意義は十分にある[5]。

逆にいえば、現在の社会学では、「行為」は必ずしも「他の行為への理解と他の行為による理解をその成立の不可欠な契機としてふくむ」ものではない。したがって、こうした意味での理解を特に「コミュニケーション」と呼ぶことも、こうした意味での理解をふくむ行為全体を「コミュニケーション」と呼ぶことも、十分に分析的な意義がある。どちらの呼び方でも経験的な記述の上ではほぼ等価になる。また、個々の文脈でどちらであるか区別するのは容易なので、両方を「コミュニケーション」と呼んで差し支えない。

そうやって読めば、例えばルーマンの『社会の社会』第一章や第二章でのコミュニケーショ

ン論のかなりの部分は、ウェーバーの理解社会学の方法論的再検討や、エスノメソドロジーや象徴的相互作用論などとも整合性がとれる形で理解できる、と私は考えている。これも、将来もし行為が「他の行為への理解と他の行為による理解をその成立の不可欠な契機としてふくむ」ことが自明になれば、「行為」という語だけを使う方が自然だろう。その意味では「コミュニケーション」「コミュニケーションシステム」という表現も暫定的なものでしかない。「行為が関係的に定義されることだけ認めれば、……M・ウェーバーが提唱した理解社会学の延長上に書き換えることができる」(15頁)という文は、そういう含意をこめて書いた。

II.7.「伝達／情報／理解」とシステム

以上の議論をルーマンのいうコミュニケーションの三つの構成要素、「伝達／情報／理解」に引き移せば、伝達／情報それぞれの内容が同定されることが、行為の意味を理解することにあたる。伝達は情報を成立させたものであり、具体的にはさまざまにありうる。典型的なのは「推測された伝達意図」だろう。したがって、意図も広い意味では意味の一つである。

例えば、組織システムであれば、上司の「B社の意思決定は素早い」という発言は会議での議事録に記載されれば公式に意味をもつが、このときの伝達意図はさまざまにありうる。会社の業績向上をねらって発言したという形で組織目的に結びつけられれば、この伝達もまた組織システムの一部として発効する。それに対して、部下をいじめたかったという個人的な目的に結びつけられることもある。

どちらになっても、発言そのものは一定の参照鍵をみたせば、組織システムの要素として発効し、効力をもちつづける。つまり、情報となる。具体的にいえば、「あの上司の発言の意図がどうであれ、そのときあなたは反対しなかったではないか」といわれざるをえない。それを覆す正当な理由をさらに提示できないかぎり、意図はどうであれ、発言内容が正しいことを前提にふるまわなければならない。

裏返せば、意味の理解と意図の理解が区別でき、社会的には前者が後者に優先されることで、伝達と情報は一般的に区別できる。すなわち、伝達と同時的に成立しながらも、伝達とは別の水準で妥当性をもつ情報というあり方が成立しうる。もちろん、だからといって、情報がつねに内容をもつとはかぎらない。『意味とシステム』第四章で述べたように、情報が実質的に無内容になるようなコミュニケーションの接続のあり方も想定できる。

ルーマンの「伝達／情報／理解」は必ずしも明確に定義されておらず、これが唯一の正しい解釈だとはいいきれないが、コミュニケーションを行為の意味の理解だととらえれば、少なくとも整合的なモデルを一つあたえることができる。丁寧にいえば、主意主義的行為理論以降の研究の蓄積を引き継ぎつつ、コミュニケーションシステムという考え方を活かすことができる。

さらに敷衍すると、伝達／情報の内容が行為の意味にあたるとすれば、そのどちらかが特定のシステムに帰属する場合は、伝達／情報の区別が成立することで、システムの要素が一つ成立する。オートポイエーシス論ではシステムの要素が再生産されることがシステムの内と外の区別を成立させる。したがって、システムの要素として行為の意味が同定されることは、それ自体で、システムが自己言及と他者言及をしたことになる。つまり、情報によって自己と他者とを同時に観察したことになる。

そう考えれば、コミュニケーションによるシステムの自己観察という事態は、整合的に理解できる。ただし、この場合でも情報であるかどうかは事後的に書き換えられうるので、客観的な実在としての外部を観察したことにはならな

い。したがって、コミュニケーションの定義②においては、環境開放性は保証されないという、『意味とシステム』第四章の結論にかわりない。

II. 8. ルーマンの読み方

最後に、ルーマンのテクスト読解について述べておく。

まず、個々の箇所の読解の妥当性については、率直にいって、あまり争う余地がない。私より三谷さんの方がはるかに精密に読んでいると思うので、批判は素直に受け入れたい。例えば「コミュニケーションは……後部から可能になる」という文の意味もそうである(p.123)。

その上で、私の方から三谷さんに訊いてみたいことがある。今回の書評を読んで、私は「どこかで読んだことがある議論だな」と思った。私の理解が正しければ、今回の書評で私に向けられた批判は、三谷さんの論文「ルーマン型システム理論の妥当性条件」(『ソシオロゴス』28号)で、ルーマンの「行為はコミュニケイションの中で構成される」という命題をとりあげて、これが「基礎命題として採用すべき」(同p.2)でないと判断された理由と同じものだと思う。

正確にいえば、そこでは第一の理由として、「他人がいないところでは行為ができないことになる」ことがまずあげられている。さらに第二の理由として、「経験的な帰属過程だけを行為成立の契機としてしまうと、たとえば意図の存在などによって理論家が特権的に行為を認定していたときに較べて、行為として認められるものの数が激減する」など、主意主義的行為理論が妥当しなくなることがあげられている。その上で、この命題を「モデル主義」的に解釈しないことが、つまり現実の経験的記述として解釈しないことが提案されている(同p.4)。

第一の理由が成立しないことは、『意味とシステム』ですでに述べた。第二の理由が成立しないことは、上で述べた。一つ付け加えれば、もし本当に「激減」しても経験的記述の上では全く支障がない。妥当性の高い理論が具体的にない段階で、可能性の広さ狭さを論じることは無意味だと思う。

そして、もし私の立論がまちがっていなければ、三谷さんが「ルーマン型システム理論の妥当性条件」で現実の経験的記述ではないとしたルーマンの命題群、例えば「行為はコミュニケイションの中で構成される」「社会的システムの要素は行為ではなくてコミュニケイションである」といった命題群は、まさに現実の経験的記述になる。つまり、私が『意味とシステム』で述べたことと、ルーマンがコミュニケーションシステム論として述べていることはかなり近くなる。

さらにいえば、「ルーマン型システム理論の妥当性条件」は通常の、よくあるルーマン読解に抗して書かれたものだと思う。つまり素朴に読めば現実の経験的記述に読めるが、それは理論的に成立しないから別の読み方が必要だ、と主張したものだと思う。もちろん、これもあくまでも推測だが、もしこの推測が正しければ、ルーマンのコミュニケーションシステム論を素直に読めば、それは現実の経験的記述であり、「他人がいないところでは行為ができないことになる」と主張し、主意主義的行為理論を否定するものになる。

だとすれば、(1)『意味とシステム』での立論が正しいか正しくないかにかかわりなく、ルーマンの著作を素直に読めば『意味とシステム』とかなり似た内容が書いてあり、そして、(2)もし『意味とシステム』の立論がまちがっていなければ、ルーマンのコミュニケーションシステム論は現実の経験的記述になっている。三谷さん自身のルーマン読解にそっても、この(1)(2)が成立するのではないだろうか。

その場合、私のルーマン読解と三谷さんのとはそんなにちがわないことになる。ちがいはむ

しろコミュニケーションシステム論が現実の経験的記述として成立するかという、テクストの一次的な解釈とは別の地点にある。そのちがいゆえに、テクストの意味としてどう受け取るべきかがちがっているだけではないだろうか。

決して忠実な読み手でない私がいうのもなんだが、テクストは素直に読めばいいと思う。そして、社会学者や社会科学者が社会について述べているものであれば、まず現実の経験的記述だととるのが自然だと思う。ルーマンの著作もそう読めばいい、というのが私の考えである。

Ⅲ. 理論と実証の相互内破

Ⅲ. 1. 後半部の意味

次に、出口さんの書評に移りたい。

三谷さんは辛口、出口さんは甘口というちがいはあるが、『意味とシステム』の最も根元にある思考へ批判的な眼差しをむける点では、共通する部分が多いように思う。それゆえ、このⅢ.は出口さんへのリプライであると同時に、三谷さんへのリプライの続きでもある。

出口さんは『意味とシステム』の思考を「内破する」という言葉で表現されている。私も執筆中にもこの言葉を連想しなかったわけではないが、今回の書評を読んで、考えていた以上に的確な表現だと思わされた。せっかくなので、この表現を使いながら、出口さんの問いかけに応えていきたい。

まず、出口さんと三谷さん、お二人に共通する大きな問いは、やはり、理論とは何か、だと思う。出口さんは章構成にもふれておられるが、『意味とシステム』は８章構成で、頁数でみれば前半４つの章が3/4弱、後半４つの章が1/4強を占める。前半と後半と呼ぶにはやや不釣合いだが、私にとってはやはり二つは前半と後半であり、後半部あっての前半部であった。

そこには当然、理論とは何かについての私の考えがある。理論とは、経験的な記述の妥当性を成立させるために必要な予備的考察だ、と私は考えている。

これは内部観察というあり方と関連する。社会を内部観察するとした場合、社会は観察の対象であるだけではなく、観察の条件でもある。それゆえ、社会とは何かの予備的考察なしに、社会の経験的記述を十分に展開することはできない。その点をふまえてさらに敷衍すると、理論とは、社会学的な観察の対象であるとともに条件であるような何か＝「社会」を論理的に構築したもので、それを明示的に経験的記述の前提におくことで、観察の妥当性の一部が明示される(287-288頁)。

この、いわば徹底的に経験的記述志向的な理論の構築、それも方向性を抽象的に示すだけではなく、実際に一度やってみせることが、『意味とシステム』を書いた大きな目的でもあった。序章で述べたいくつかのこと、例えば「理論／実証」の再定義や、なぜ私がかつて理論社会学を名乗らなかったのかも、そこに関わってくる。

私自身の理解では、例えば、ウェーバーが「社会学の根本概念」原稿でやってみせたのはそういう作業であり、またルーマンのいう「社会の自己記述」も同種の作業になる。もちろん、これに関しても学説研究の専門家からは異論があるだろうから、今のところはあくまでも私はそう読んだ、というだけであるが。

Ⅲ. 2. 理論と実証

この定義を採った場合、論理的一貫性や簡潔さ以外に、もう一つ、理論の評価基準が加わる。それは、経験的な記述の妥当性につながらないものは評価の対象にならない、ということだ。だから、例えば理論家にとって自由度が高いという理由で、主意主義的行為理論を肯定的に評価することはできない(⇒Ⅱ.8)。その高さを使って具体的に理論が構築されないかぎり、空手形になるからだ。

裏返せば、この立場では、経験的記述はつねに理論をふまえ、理論はつねに経験的記述で試される。それも暗黙に仮定されているのではなく、明示的にそうなる。(a)経験的記述の条件を書き出すという面でも、(b)経験的記述の可能性を開くという面でもそうだ。より具体的にいえば、(a)では、理論は経験的な記述に対して「それは何を本当にとらえているのか」を反省的にとらえ直して再定式化する。(b)では、経験的な記述を重ねていく上で出てくる「何かをつねにとらえそこなっている／過剰に同定している」という気持ち悪さに暫定的な答えをあたえる。

その意味で、(a)では理論が経験的な記述を内破していき、(b)では経験的な記述が理論を内破していく。(b)の面は理論や学説研究の専門家には直感的につかみにくいかもしれないが、もし記述の条件である「社会」を理論が十分に適切にとらえているのであれば、それにそった明示的な記述がつねに過小または過剰になることはない。記述すべき何かを系統的に見逃しているか、記述の性能を過剰に見積もっているか、いずれにせよ、理論が記述の条件を適切にあたえていないからこそ、記述が過小または過剰になる。

そういう形で、理論は経験的な記述によって検証される。裏返せば、経験的な記述は、明示的に前提にしている理論が明示的には見えていないことやものにも反応してしまう。だからこそ、経験的な記述は理論を内破しうる[(6)]。

経験的な記述が理論を内破していき、理論が経験的な記述を内破していく。その積み重ねによって社会科学は進んでいく、と私は考えている。それゆえ、理論だけの専門家も実証だけの専門家も、どちらも健全な姿ではないと思う。得手不得手もあり、作業の効率性もあるから、どちらかに重心をおくとしても、社会科学が内部観察であるならば、実証的関心をもたない理論も、理論的関心をもたない実証もありえない。私がルーマンとウェーバーを特に高く評価するのも、この相互内破プロセスを実際にやってみせたからだ。

Ⅲ. 3. ルーマンと私

出口さんが提示したもう一つの重要な問いにも、その延長で答えることができる。

出口さんは、『意味とシステム』の思考が「ルーマン研究者」にとってもつ意味について問われた。この問いに素朴に答えるのは簡単だ。例えば、ルーマンの全体社会システムの概念が経験的な記述にとって不適切だとすれば、ルーマンのテクストだけから適切な理論は構築できない。つまり、ルーマンを大きく参考にしながらも、最終的には自分の頭と手で適切な理論を構築していくしかない。ルーマン学ではなく、社会学だと自称するかぎりは。

けれども、出口さんが本当にいいたいのは、そんな素朴なことではないと思う。この問いはむしろ、Ⅲ.2で述べたような内破のプロセスの上に、ルーマンのテクスト読解と私自身の思考とを置くことで、両者の関係をもっと明確に提示できたのではないか、という批判だと思う。少なくとも、そう受け取ることがより良い答えに通じる。

事実、今回の書評を読んで、この点はたしかに『意味とシステム』の大きな欠陥の一つだと思わされた。その意味で、理論と実証が相互に内破するという考えに、私自身まだ徹しきれていなかった。これは、何がルーマンの述べていることで、何が佐藤俊樹の考えていることかが不明確だ、という三谷さんの批判とも重なる。表現の仕方はことなるが、馬場靖雄氏の『週刊読書人』での書評や、高橋徹氏の『理論と方法』での書評でも、同じ点が指摘されていた。その点の不十分さは認めざるをえない。

その上で、出口さんの提案に乗る形で整理

し直すと、『意味とシステム』には６つぐらいの重要な論点がある。「ぐらい」といったのは、内破プロセスの途上にあるため、何を考えていたかを私自身がまだ完全に対象化できていないからだ。

Ⅲ. 4. 論点の再整理

簡単に箇条書きすると、以下のようになる。

論点１：システムは複雑性の高低では定義できない（＝複雑性の高低の記述が、実際には、「こちらはシステムだから複雑性が高い(または縮減されている)」というシステム定義の反復になっている)。

私自身はもちろん論点１は正しいと考えている。これはシステム理論では決着ずみの論点で、例えば一九八〇年代後半に宮台真司氏が指摘しており、河本英夫氏も同じことを述べている。オートポイエーシスの概念に複雑性の縮減は必要ない。

そして、ルーマン自身もハーバマス対ルーマン論争以降、この論点１を認める方向に次第に進んでいき、それが「不確定性Kontingenz」の内容の変化にも出てきた、と私は考えている。もちろん、この仮説はテクスト読解の水準で検証にかけられるべきものだが、そう考えた一番大きな理由は、ルーマンがオートポイエーシス論を導入したことにある。システムを記述する全く新たな論理を持ち込んだのは、具体的な社会事象の記述を進める上で、それまでのシステム記述の不適切さを強く感じたからではなかろうか。

論点２：組織システムが「ある」といえる条件と、全体社会システムが「ある」といえる条件は決定的にちがう。

これについては、ルーマンは一貫して決定的なちがいはないと考えていた、と私は考えている。この点はルーマン読解上も異論はないと思う。それゆえ、問題は論点２が正しいかだけにしぼられる。

ちがうとする理由は『意味とシステム』一〜二章で詳しく述べたが、突き詰めれば、全体社会システムの同定には部分的にも反証可能性がないことによる。全体社会システムが「ある」という命題は、コミュニケーションの定義に完全に依存する。それに対して、組織システムや機能システムの場合は、個々のシステムの「内／外」区別が意味境界の形で具体的に観察可能であり、部分的には当事者水準でも了解されている。それゆえ、例えば「この種類のシステム境界はこういう特性をもつ」という命題が経験的に検証できる。

論点３：ある問題が解決すべき何かであるにもかかわらず（表面的には解消されたが）本当は解消されていないという記述や、そういう事態を社会事象の成立要件とする論理は、理論社会学が一般理論と想定される水準、すなわち観察者がそのまま当事者になる水準では成立しない。

これについては、ルーマンは最後までこういう記述や論法を使いつづけた。全体社会システムの脱パラドクス化はその典型であり、「二重の不確定性Doppelte Kontingenz」の議論もそうなっている。しかし、その一方で「自己論理Autologie」を徹底させれば、こういう記述や論法は成立しなくなる。したがって、論点１と同様に、ルーマンはこれが成立しない方向に動いていたが、その動きは論点１よりもはるかに弱かった、と私は考えている。

論点４：コミュニケーションの意味は事後的に成立する。

理論社会学的にもルーマンのテクスト読解上も、これが一番大きな争点になるだろう。これ

については、論点４は正しく、そしてルーマン自身もそう考えていた、と私は考えている。

論点４が正しいと考える理由はⅡ.で述べたので省略する。ルーマン読解として妥当かどうかは、テクスト解釈の整合性という形で経験的に検証可能であり、他の人の検証作業に判定を委ねたいが、従来のルーマン読解はこの点で奇妙な二重性を見せている(『意味とシステム』第二章４・６参照)。三谷さんの場合は、ルーマンのテクストを素直に読めばそう読めるが、それは理論的に正しくないので認めない、という議論になっている(⇒Ⅱ.8)。ここでは読み方の提案という形でこの二重性が明確に主題化されているが、他の方の読解では明確な区別がないように見える場合もある。

『意味とシステム』では全く想定していなかったが、ルーマン自身もそうだったという解釈もありうるかもしれない。

論点５：相互作用のコミュニケーション特性は意味境界ではなく物理境界による。

この論点は論文「『社会システム』はいかにして可能か」から大きな見解の変更がおきた点の一つであり、『意味とシステム』でもまだ脆弱な部分である。事実、「『社会システム』はいかにして可能か」では、七〇年代と八〇年代以降でルーマン自身が定義を変えたと述べていたが、『意味とシステム』では、七〇年代にも二つの定義があったと考えられる、という弱気な主張になっている。

これに関しては、ルーマンの相互作用の定義はかわっていない、というのが多くのルーマン研究者の意見であり、私もそれを認めざるをえなくなった、というのが率直なところだ。その上で、論点５は正しいと考えている。相互作用を意味境界によるシステムだとすれば、組織システムと区別がつかなくなる。つまり、ルーマンの相互作用の定義は最初から最後まで重要な点で混乱していた、と今は考えている。

これは「抗議運動」という第四のシステム類型とも絡んでくるので、今後さらに検討する必要があるが、『意味とシステム』で述べたように、組織システムとは明確に異なりかつ意味境界をもつ相互作用システムを、私自身はまだ再構成できない。また、経験的記述としても、「組織システムにおける相互作用」、「機能システムにおける相互作用」、あるいは「相互作用によるシステム間の作動連結operative Koppelung」といった記述を成立させるためには、相互作用を、意味境界をもつ別種のシステムとしない方がよいと考えている。

論点６：論点１～５が全て正しいとしても、組織や機能システムをめぐるルーマンの経験的な記述の多くは成立する。それらは、従来の社会学理論になかった独創性と分析的な意義を十分にもつ。

論点１～５とちがって、これはメタ的な論点だが、『意味とシステム』においては重要な主張である。

Ⅲ.4. 相互内破のプロセスとして

こういう形にすると、たしかに、個々の論点の成否とは別に、『意味とシステム』全体の主張が明確になってくる。率直にいって、執筆時にはここまで考えがおよんでいなかった。出口さんの「内破」という読みによってあらためて気づかされたが、私の思考の根元には、経験的記述にむけて理論を内破し、理論にむけて経験的記述を内破する、という姿勢が強烈にあるようだ。その方向で、すなわち相互内破プロセスの途上にあるものとして、ルーマンのテクストも読み、私自身の議論も展開していることがよくわかった。

そういう点で、出口さんの書評はきわめて的確なもので、それゆえ三谷さんの書評とは別の

面でも、得るものが多かった。深く感謝したい。

Ⅳ. システム論と社会学

最後に高橋さんの書評について。

この書評は今回の企画書評の最初にあり、『意味とシステム』の内容を紹介することに重点がおかれている。著者としては大変ありがたかったが、その分、他の二つに比べて批判的な論点の分量が少なく、さらに他の書評と重なる部分も多い。それらに関しては、すでに実質的に応答していると思う。

ただ一つ、簡単に補足しておきたい。それは、コミュニケーションをどうとらえるかという論点である。Ⅱ.で述べた通り、私はこれをより自明な言葉で定義できないと考えている。そうである以上、私も「コミュニケーションを実体的に捉え」(p.109)ていることにかわりはない。その上で、その意味がどのように同定されているか、従来よりもより正確な記述をあたえようとした。

構造主義以降、とりわけいわゆる構築主義の流行以降、「実体的」という言葉はかなり乱暴に使われてきた。他人の議論を「実体的」と論難する当の議論の方がより実体的な事例も少なくない。

実際には、実体的でない議論などないと私は考えている。だから、何をどの程度まで実体的に持ち込まざるをえないかという形で考えて、できるだけ前提負荷の少ない持ち込み方を選ぶしかない。その点をふまえて、私はシステムを実体的に持ち込むよりは、コミュニケーションや理解を実体的に持ち込んで、その上で、それらでの意味を同定するあり方をより正確に記述し、さらにそれを通じて(「コミュニケーションがある」とはちがう意味で)「システムがある」といえる条件を明示化することを選んだ。

それ以外の論点、例えばシステム理論と言説分析との並行性などについてはご指摘の通りである(p.109)。今回のリプライでも感じたことだが、社会学におけるシステム理論というのは、十分に操作的に定義された特定の考え方というよりも、同時代の社会学での社会や秩序のとらえ方を、論理的な構築という形で明示化する試みのようだ。

ルーマンがシステム理論を書き換えたことで、この点はいっそう明確になったわけだが、パーソンズの段階でもすでにそうなっていた。三谷さんの書評でも示唆されているように、パーソンズの考え方を表面的に非難するのは容易だが、パーソンズの考え方とはっきりちがう方向で、社会や秩序を考えるのは決して容易ではない。構造機能主義を批判する側が実は構造機能主義と同じ論法を使っている例は、よくある。それだけに、論理的な構築を明示する作業が欠かせない。

理論社会学という分野が意味をもつとしたら、そうした同時代的な社会学の思考の反省としてではないか、と今は考えている。

註

1. 厳密にいえば、デイヴィドソンのように、確定できないと確定できないことをもって確定しているとする可能性があるが、そのためには「二重否定は肯定である」という古典論理学の公理を導入する必要がある。それを採らないことは『意味とシステム』27頁で述べておいた。
2. 経済学の均衡論をモデルにしたため、パーソンズの行為理論は相互行為における時間性を考慮できなくなった。そこがウェーバーの行為連関論との大きなちがいの一つであり、ウェーバーを主意主義的行為理論にふくめるのが不適切な理由でもある。ルーマンも予期理論の枠内では、相互行為を非時間的にしかあつかえて

いない。

3. この事例は、行為の正しい意図を意味として社会学者が理解したという事態ではない。そう考えた場合、社会学の成立や社会学者による言及が歴史的な必然になってしまう。どの社会学者も言及しなかったこの種の差別はたくさんあるはずだ。社会学者が言及することで、言及された行為の意味が事後的に変化した、と考えるのが妥当である。
4. この理解を「自らの行為への理解」ととれば、そういう事態はおきないが、その場合、行為 a は行為 a を理解することを構成要件の一つにするので、行為 a という単位性Einheitが成立しなくなる。

   行為が単位性をもたないとすることもできないわけではないが、その場合も、行為の意味の経験的帰属が何らかの形で社会内で成立するとすれば、この帰属は自らの行為の外部で成立している。この帰属が行為とみなせるものならば、「他の行為への理解をその成立の不可欠な契機としてふくむ形での行為」と同じことになる。行為とみなせるものでなければ、行為あるいはコミュニケーションの集合として社会を考えることは適切ではない。
5. 逆にいえば、意図の理解が意味の理解の一形態だと一般的に了解されたり、意味の理解と意図の理解が同一だと一般的に了解されるようになれば、「コミュニケーション」は「理解」より限定的ではなくなる。その場合には、より日常語に近い「理解」を用いる方が自然だろう。
6. 理論が想定していない事態を経験的記述はひろえない、という立場はありうる。それが正しくないと論証することはできないが、そういう立場の人の記述はつまらない。その人の脳内リアリティにつきあわされている感じがする。『意味とシステム』序章での「理論／実証」の定義はそうした経験にもとづく。

文献

Anscombe, Getrude E. (1957) Intention, Basil Blackwell. ＝(1984) 菅豊彦(訳)『インテンション』産業図書(底本は第2版).

Davidson, Donald (1963) “Actions, Reasons, and Causes,” in Donald Davidson Essays on Actions and Events, Oxford University Press. ＝(1990) 服部裕幸・柴田正良(訳)『行為と出来事』勁草書房(底本は初版).

Merton, Robert K. (1968) Social Theory and Social Structure (3rd ed.), Free Press. ＝(1961) 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎(訳)『社会理論と社会構造』みすず書房(底本は第２版).

Kripke, Saul A. (1982) Wittgenstein on Rules and Private Language, Blackwell. ＝(1983) 黒崎宏(訳)『ウィトゲンシュタインのパラドックス』産業図書.